

ケースメソッドを活用した新しい異文化教育

～英語学習を楽しむ大学生活を送るために～

1150439 玉井 里奈

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

近年グローバル化が進んでいるが、高知工科大学マネジメント学部では、英語の講義、ならびに、英語を用いた専門基礎科目の受講者数が減少している。その根源的一因には、英語を学ぶ理由が明確に感じられないことがあるように思われる。本研究では、英語を学ぶ理由を明確にし、かつ、楽しく学ぶために、ケースメソッドを活用した異文化教育の方法を検討する。その具体事例として、筆者が実際に体験した多文化における意思決定問題を取り上げ、ケースメソッドを用いた新たな授業方法を提案する。

2. 背景

筆者は留学生7名在籍している研究室に所属している。ある時、送別会を行うために幹事を任されたので、いつものように居酒屋で飲み放題3時間3,500円の予約をし、イスラム教徒のために豚肉は料理には用いないことを確認したうえで、案内文を日本語と英語で作成し、自信を持って研究室全員にメールで送信した。しかし、ある外国人から帰ってきた返信は「なぜ私たちはお酒を飲まないのに飲み放題なのですか。この料金の決め方は不公平ではないでしょうか。」という内容であった。筆者にとって、今まで「飲み放題」は当たり前すぎて、外国人にその妥当性を聞くことなど思いもよらなかった。このため、お互いの文化の違いに改めて驚いた。これからの英語学習において大切になっていくのは、単に言語を上手く操る能力にとどまらず、十分に理解し合えていないお互いの文化を埋めるためのコミュニケーションであると気づいた。同時に、この体験を大学の英語学習に取り入れることができたら、英語学習はさらに有意義かつ楽しいものになるのではないかと感じた。

3. 目的

英語を学ぶ理由を明確にし、かつ、楽しく学ぶために、ケースメソッドを活用した異文化教育の方法を検討する。その

具体事例として、筆者が実際に体験した多文化における意思決定問題を取り上げる。英語学習の意義と楽しさを理解し感じるための具体的方法として、自分の体験事例を脚本化し、自らが演じる「疑似体験教材」を創り、授業に取り入れる方法を検討・提案する。

4. 研究方法

本研究は、第一に既往の文献・調査を通して、日本の学校英語教育の動機づけに関する課題を紹介する。第二に、疑似体験教材の方向性を明確にするために、英語秋田県の国際教養大学における英語教育事例、ミズーリ州立大学客室教授の古屋紀人先生も提唱する「グローバルソフトコンピテンシー」のレビュー、筆者自身の異文化体験の振り返り、高知工科大学での英語学習への筆者の感想を述べることによって、筆者が重要と考える大学英語学習の要点を提示する。第三に、経営の判断・洞察力を養うために活用されるケースメソッドをレビューする。第四に、以上の調査・分析結果に基づいて、「疑似体験教材」の具体例を作成し、ケースメソッドの英語教育への適用性を検討する。最後に、結論を述べる。

5. 日本の学校英語教育の動機づけについて

ベネッセが中学生に対して行った「中学校英語に関する基本調査」というアンケート調査は、英語学習の動機づけを探るために、貴重な情報を提供している。

英語学習に対する意識という項目の中の「あなたはどんな英語の授業を受けたいですか」という質問に対して、第一位の回答は全体の38.9%の生徒が回答した「入試に役立つ授業」であった。「言語や文化に対する理解が深まる授業は、最下位の回答であり、わずか3.6%の中学生が選択したに留まった。約4割の中学生は、英語を勉強しているのは、高校受験のためといえる。

次の調査結果は、中学での英語学習への意識が、高校でどのように変化したかを示したものである。中学生のときに英

語が「好き」「どちらかというと好き」と回答した生徒は、全体の約7割である。しかし、高校生になって「好き」、「嫌いから好きに」と答えたものは全体の約3割に減少した。また、中学生では「どちらかというと嫌い」と「嫌い」が22.8%であったが、高校生では「好きから嫌いに」と「嫌い」が3割に増加しているという調査結果がでている。

6. 英語教育の先進事例

6.1 国際教養大学

国際教養大学では、鈴木学長が「これまでの自分を形作ってきた価値観や習慣から一旦自分を自由にし、その上で新しい自分を自分で創っていく」という理念を掲げている。それに基づいて、学生が中学生に実際に英語を教える機会を設けつつ、「英語で学び、英語で考える」という考え方で授業を行っている。

6.2 グローバルソフトコンピテンシーについて

本節では、ミズーリ州立大学客室教授の古屋先生も提唱しているグローバルソフトコンピテンシーを概説する。

グローバルコンピテンシーを学問的に解説すると、「特定の職務遂行場面や課題状況において、ある基準に照らして、効果的な成果もしくは優れた成果の原因となるような、個人の潜在的特性」と定義されている。そのなかにある、「グローバルソフトコンピテンシー」の概念の根幹はモチベーションであるとされている（図6-1）。



図6-1 グローバルソフトコンピテンシーモデル

各個人が持っている態度・行動、規範・価値観を支える根幹は、「人としてどうあるべきか」というモチベーションである。ただし、この開発は決して容易ではない。英語学習においても同様の議論が成り立つと考えられる。講師や他人の経験を単に学生に伝えるだけでは、英語学習への動機付けを継

続できない場合が少なくない。海外で働く人財が育つためには、「なぜ英語を学ぶのか」という問題を明確にし、楽しみながら、グローバルコンピテンシーを向上できる場を設ける必要があると考えられる。

6.3 筆者自身の異文化体験

私は留学生が七カ国の留学生が名所属している研究室にいるおかげで少し英語を理解し、伝えることができる。周りの日本人に比べ海外経験も豊富であり、異文化交流を難しいととらえたことはあまり無かった。

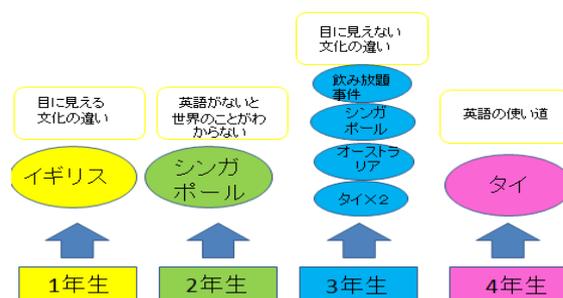


図6-2 筆者自身の異文化体験

図6-2は、筆者の4年間の海外体験での、外国へ対する心境の変化である。1、2年生のときは、「ただかっこいいから」という理由と、自分の英語力のなさからの悔しさが学習の原動力になっていた。3年生のときの海外研修で初めて、日本人の当たり前は通用せず、相手にとっての当たり前の文化も自分には未知ということを理解することができた。その溝は、英語があるから伝えることができ、埋めることができるのだと感じた。

もう一つ大変印象的な異文化体験が、本稿の背景でも紹介した「飲み放題」をめぐる文化衝突であった。筆者は、「イスラムの留学生がいたので豚肉は提供しないこと」を配慮するだけで、異文化を理解していると安心してた。外国人の本当の心情や外国文化を十分に理解していなかったのである。この対立を解決したのも英語というツールであった。このとき筆者は、自分が英語を勉強する目的と意味を明確にすることが出来たのである。

7. 対策と提案

7.1 英語授業の感想

このような体験を経て、筆者は異文化交流の関心を持つよ

うになっていった。筆者は、本学の英語授業に対して、以下のような感想を持つ場合があった。

- ・ 企業をケースに出してもあまり親近感が沸かない。
- ・ リアルさをあまり感じるができない。
- ・ 時間がなんとなく過ぎている。

このことから自分の意識の変化を有益に共有することができ、『海外と自分がどのような人生を歩んでいくのか』ということを授業で仲間と討論をすることができれば最高であると考えた。そこで、自らが脚本、演出をする疑似体験教材があればリアルに学べるのではないかと考えた。

高知工科大学生がグローバル人材として育つためには、グローバルコンピテンシーの根幹を上げること、かつ、言語はいつなんのために使うのかを学ぶ必要があると考える。筆者自らが体験し、英語を学ぶ意味・目的を理解することが出来たこの事例を授業に組み入れることができれば、グローバルコンピテンシーの根幹にあるモチベーションを向上する手法として有益なのではないかと考えた。

7.2 ケースメソッドとの出会い

そのとき出会ったのがケースメソッドである。ケースメソッドとは、実際に起きた事例を教材にして意思決定を行うことである。ケースメソッドの目的は「的確な判断力」「意思決定力」「実行力」を養うことであるが、ケースメソッドの方法を駆使し、自らが演じて体験し、シェアすることでグローバルコンピテンシーの根幹を構築することにつながるのではないかと考える。

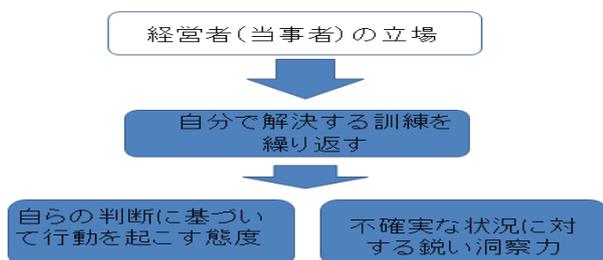


図 7-1 ケースメソッドの成り立ち

7.3 身近な例を題材としたケースメソッド教材の開発

ケースメソッドではまず、事前の個人研究が重要となる。筆者が提案する手順は以下の通りである。

- ① 個人で今まで経験した留学生との交流でつまづいたことを全て紙に出してもらおう。(先生と相談しながら決定する。作成してみたいケースを幾つか選んで、複数の学生がそれぞれのケースを作成する)
- ② 自分がシェアしたいと思った事例を、脚本を書き自分で演じ、用意してくる。
- ③ クラスの全員に撮影したものをシェアし、質問して気づきを与えながら授業を進める。
- ④ 学生がビデオのポイントを説明する。
(事例に伴った参考文献・歴史・文化も勉強し、発表する。)

自分自身の事例を用いて、以下の教材を作成した。

- ① 「飲み放題」におけるアジア人とヨーロッパ人の意見の違いを、異文化コミュニケーションの一例として選んだ。
- ② 実際に脚本とビデオを作成した。

(脚本例)

Rina: “We want to have a farewell party. It is all you can drink and eat. Is it OK for you?”

Eliza: “Thank you for your planning. I have one request for you. I cannot eat pork because of my religion.”

Rina: “Ok! Are you OK with all you can drink?”

Eliza & Lingling: “Of course! Thank you Rina-chan.”

(Contents of Email)

Hello.

Rina desu

We are going to have a farewell party for Piriya-san this Friday.

So please send me E-mail and inform me of whether you could join or not.

Place: Nagataya (near by Tosayamada station)

Time : 19:00~

Fee : 3,500yen (all you can eat and drink)

Rina: “Ok! Finish!

*in the lab

When Rina checked E-mails in the next morning, she was really surprised. One of her lab members feels unfair.

Dennis: “I don't really understand the sense in this calculation. Because there are people who don't drink, the price for the people who do becomes cheaper? It's great that the entire group now needs

to pay less but isn't it still a bit unfair to those who don't drink? Isn't it possible for all the non-drinkers to order their non-alcoholic beverages separately?

③ クラスの全員に撮影したものをシェアし、質問して気づきを与えながら授業を進める。

☆If you are 'RINA', why Dennis send E-mail to her? And which point did Dennis felt unfair?

Rina: "I had no idea on about how you were feeling about all you can drink. Because I think this is natural for Japanese."

Lingling: "We know all you can drink is natural for Japanese people. But for foreigners we have different no ideas. Our opinion is 'Why do we have to pay the same price high money? We don't drink a lot.'"

Rina: "Then, why did you agree with us?"

Eliza: "As a Moslem, I don't eat pork and drink alcohol. But I respect others who drink and I didn't mind to sharing the cost with everyone. And I really appreciate you as organizer."

Lingling: "Actually me too."

Rina: "Thank you."

④この異文化間で起こった問題のポイントは「個人主義」と「集団主義」にあると考える。

アジアの人たちは、心の中では不満に思っていたり、飲む文化が無くても、表面上は日本流の考え方を受け入れており、違った意見を言わない。しかし、個人主義が強いヨーロッパの人は自分の意見を主張する。という点である。この点を、発表者は説明し、履修者全員で共有する。

8. 結果

この異文化の食い違いの問題点は、自分の意見を大切にす文化に気づけず、集団での合意を尊重することを理解しきれなかった点だ。

日本人は留学生が大切にしている文化や価値を尊敬し、また、留学生は日本人の文化や価値を尊敬すべきである。それを当たり前できれば、文化の違いで知らぬ間に溝ができることも避けられるだろう。

9. 結論

筆者が実際にケースメソッドを活用した授業作りを行うことによって、ビデオを作る前と後では参考文献へ対する理解度すら漠然と違うことを、身を持って体験した。そこで筆者はケースメソッドを活用し「疑似体験授業モデル」を自ら製作する授業方法が有効ではないかと考える。

引用文献

[1] 内藤和美、橘良治、「高校一年生における英語の学習意欲の低下と英語ざらい」

http://www.ed.gifu-u.ac.jp/kyoiku/info/kyosi/pdf/4_29.pdf

[2] 佐甲隆、野呂 千鶴子、伊藤薫、「WHOグローバルコンピテンシーモデル三重県立看護大学紀要」

<http://www1.ocn.ne.jp/~sako/whoghp.htm>

[3] 小磯かをる、「英語学習に対する情意形成のメカニズム」

<http://ouc.daishodai.ac.jp/profile/outline/shokei/pdf/151-152/35.pdf>

[4] 中矢礼美、広島大学 START プログラム：教養科目「海外フィールドスタディ」

<http://www.jasso.go.jp/scholarship/documents/hiroshima.pdf>

[5] 慶応義塾大学大学院経営管理研究科、「ケースメソッドについて」

<http://www.kbs.keio.ac.jp/seminar/casemethod>

[6] 秋田県立国際教養大学 HP

<http://web.aiu.ac.jp/>

[7] Hofstede G., 「Cultures and Organizations」, McGraw-Hill, 1991.